社長あいさつ

持続可能な成長を求めて

～社会と共生、地球と共生へ～

取締役社長

田崎 雅元

持続可能な発展を目指す「質主・量従」型経営

～不要なモノは生まない～

資源多消費型の高度成長経済は、物質的には生活の利便性・快適性を向上させてきましたが、地球環境に与える負荷が過大となり、今やそれは地球の自浄能力を超え、さまざまな環境問題が表面化し始めています。

社会は環境問題の改善に対して企業活動に大きな役割を求めており、地球環境との共生に真剣に取り組まない企業は存続が危ぶまれるといった状況下にあります。「環境の世紀」と言われる今日では、より少ない資源・エネルギーで生産活動を行いながら人々の物質的満足に応えることが、モノづくりを行う企業の使命となっています。これからはエネルギー多消費型ではなく、持続可能な循環型の社会に向けた技術が、脚光を浴びてくるのは間違いありません。

過去における大量生産でコストを下げれば新しい需要が生まれるという短絡的な発想は、時として供給過剰をもたらしてきました。廃棄物を含めて世の中から「要らない」と判断されるものを生み出さない事が大切です。貴重な資源・エネルギーを消費して生み出した製品は、顧客に満足して頂けるものでなければなりません。

私は社長就任以来、**「質主・量従」**型経営への転換を経営方針として掲げてきました。量よりも質を重視するということは、**「要らないモノはつくらない」**ということと同時に、付加価値の高い製品・サービスを提供して顧客の満足度を高めるという意味でもあります。当社はこの経営方針のもとで諸活動を展開し、着実に成果を上げつつありますが、今後さらにこれを徹底していくことで、持続可能な社会の発展に寄与し、当社の社会的存在価値をより高めていきたいと考えています。

こころの豊かさを求める技術の革新

～高いハードルへのチャレンジ精神～

「質主・量従」型思想を、製品づくりに当てはめた場合、資源やエネルギーの消費はミニマムにとどめ、製品によって得られる満足はマキシマムにするということになります。これは、難解な方程式になりますが、この方程式を解くカギはあります。それは、製品の中に「環境」というパラメーターを取り入れ、自然の恩恵をうまく利用し、いかにバランスの取れたコストで価値あるモノを生み出すかと言うことです。この解を導く過程で競争力の源泉となる「技術革新」が生まれるのです。

天然資源が乏しく人口密度の高い日本には、必然的に自然と調和しながら限りある資源を上手に生かしていくという伝統があり、その遺伝子は今の日本人にも受け継がれていると思います。

日本の伝統に支えられた知恵を結集すれば、資源多消費型の高度経済成長の時代とは異なる新しい競争力が生まれ、新たな発展の道筋も見えてくるのではないでしょうか。

例えば、地球が太古から少しずつ蓄えてきた石油・石炭などの化石燃料から生み出した電気や熱をムダに逃がさずもっと有効に利用する技術や、バイオマス発電・風力発電、また無限のエネルギーともいえる太陽エネルギーの活用など、こうした新しい技術が人々の暮らしを支えていくことになっていくと思いますが、これらの領域で**Kawasaki**の総合的な技術力が存分に発揮できるのではないかと考えております。

また、今後、水素の利用が環境問題を解決する重要なカギになるでしょう。水素の利用については、まだまだ克服すべき課題が山積していますが、難しい課題を飛躍のための好機と捉えて、「**Kawasaki**の技術で可能にしてみせる」というチャレンジ精神をもって、このロマンのあるテーマに粘り強く挑戦してほしいと思います。

環境というフィルターを通すことによって、企業の成長に明暗が生じてくる時代がすでに始まっています。当社は、エネルギー収支に関連する製品・技術を得意としていますが、今後、こうした分野での技術開発を促進し、環境保全に直接的に寄与する製品群の供給に加えて、製品のライフサイクルという観点から環境に配慮した製品を社会に提供し、持続型社会の形成に貢献していきたいと思います。

信頼されるブランド「Kawasaki」であるために
～「着眼大局・着手小局」で身近な努力を継続的に～

絶え間ない技術開発を通じて、「地球環境との調和」を目指した付加価値の高い製品を生み出すとともに、顧客にその製品の価値と効用を理解していただく努力を続けることも重要です。

最近、製品のイニシャルコストとランニングコストを総合した「ライフサイクルコスト」が注目されています。これは、これまでの使い捨て文化への反省から、製品のロングユースを求めるとともに使用時のエネルギー消費低減を追求する動きの表れですが、顧客にとっては、ランニングコストの低減に加えて二酸化炭素排出量削減など環境改善の面でもそのメリットは大きなものとなります。こうした優位性を顧客に納得していただくには、確かなデータを蓄積し、**トータル・エネルギーマネジメント**という立場からの提案力を強化しなければなりません。当社製品の性能、品質、サービスを総合的に向上させると同時に、こうした提案活動を積極的に展開していくことで、「**Kawasaki**ブランド」への信頼を揺るぎのないものにしていきたいと思います。

私の座右の銘に**「着眼大局・着手小局」**という言葉があります。視野はあくまでも広く持ちつつ、身近なところから実行に移していくという意味ですが、これは環境活動にも当てはめることができます。「地球環境との調和」を目指して、当社としても事業活動の中でこれを着実に実践していくことはもちろん、地域社会や家庭においても、日々の営みの中で環境の負荷を軽減するライフスタイルを採り入れるなど、小さなことから実践してほしいと思います。循環型社会の形成にマジックなどはありません。地道に継続的にコツコツとできることから取り組んでいくことが重要であります。

企業は、社会に生かされている存在です。事業活動が社会に与える影響の大きさを考えれば、企業が環境保全問題に真剣に取り組むのは当然です。加えて、最近では企業活動のさまざまな局面で、企業の社会的責任に厳しい視線が向けられるようになりました。反社会的な行為が企業の存続すら揺るがしかねない今、環境問題を含めて、さまざまなリスクを予見し防止する方策を講じなければなりません。なかでもコンプライアンス（法令遵守）は重要な問題です。企業も社会の一員であるとの自覚をもって、今後とも透明性の高い経営に注力していきたいと考えています。

社会に必要とされるモノづくりに徹すること、そのなかで企業も社員も社会環境と調和しながら活き活きと活動すること、それが企業の永続的な発展につながることになると確信しています。

目　次

社長あいさつ 1

会社概要 3

カンパニー・関係会社
車両／航空宇宙／ガスタービン・機械／プラント・環境・鉄構／汎用機／（株）川崎造船 3

編集方針 4

環境経営
- 環境憲章 5
- 中長期環境ビジョンに向けての活動計画 5
- 最高環境管理統括者あいさつ／環境管理体制 6
- 2003年度 重点施策と評価 7
- 環境マネジメントシステム 8
- 環境会計 10

環境配慮製品
- 製品アセスメント／LCA／グリーン調達 11
- 代表的な製品の環境負荷低減事例 12
- 環境配慮製品への取り組み 13
- 環境保全製品への取り組み 15

特集／環境関連ビジネス
- 木質バイオマス発電技術 17

環境配慮生産
- 省エネルギー 19
- 地球温暖化防止 19
- 廃棄物削減 20
- 化学物質削減 20

社会との共生
- 社会貢献 21
- 情報開示・コミュニケーション 21
- コンプライアンス 22
- 社員とのかかわり 22

環境負荷データ
- 各カンパニー／関係会社 23
- 生産拠点 25